

バートン・クラーク教授のご逝去を悼む

有本 章（比治山大学高等教育研究所長）

バートン・クラーク (Burton R. Clark) 教授は、2009 年 10 月 28 日に米国カリフォルニア州ロサンゼルス市において享年 88 歳で逝去された、との悲報に接しました。[正確な情報は John Hawkins 教授 (UCLA) から頂戴しました。] クラーク教授は、著名な教育者かつ研究者であり、UCLA の教育・情報研究大学院 (GSE&IS) の名誉教授であり、高等教育研究の第一人者であります。その訃報に接し、まさに巨星墜つとの感慨を禁じえません。

教授は、世界的に高名な高等教育社会学者の一人として、優れた業績を過去 50 年余にわたり連綿と公表しつづけ、高等教育の社会科学研究の領域を牽引する洞察力と刺激力に富む名著の数々を世に送り出しました。とりわけ、米国の成人教育、コミュニティ・カレッジ、大学、大学院、学生文化、大学教授職をはじめ、世界の高等教育システム、大学組織、起業大学などに焦点を合わせた比較社会学的研究が注目の的になりました。例えば、Adult Education in Transition (1956), The Open door College (1960), Educating the Expert Society (1962), The Distinctive College (1970), Academic Power in Italy (1977), The Higher Education System (1983), The Academic Life (1987), Places for Inquiry (1995), Creating Entrepreneurial Universities (1998), Sustaining Change in Universities (2004), そして下記の著書 (2008) などは主著とみなされるでしょう。

クラーク教授は UCLA で研究を開始し、1949 年に学士号、1954 年に Ph.D. を授与されました。社会学科での博士号の指導教授は、Philip Selznick, Leonard Broom, William S. Robinson でした。以後の経歴には米国屈指の五つの研究大学でアカデミック・ワークに従事した事実が刻印されております。スタンフォード (社会学、1953-1956 年)、ハーヴァード (教育学、1956-1958)、UCB (教育学、1958-1966)、イエール (社会学、1966-1980) の各大学を経て、最後には UCLA に戻り、冠講座の Allan M. Carter Professor of Higher Education に就任、The Comparative Higher Education Research Group (1980-1991) を主宰しました。

その間、The National Academy of Education 会員・副会長 (1978-1982) をはじめ、米国高等教育学会会長 (1979-1980)、英国高等教育学会フェロー等を務めたほか、米国高等教育学会の Howard Bowen Distinguished Career Award (1997) やユネスコの Comenius Medal (1998) など数々の受賞歴があります。

高等教育研究の領域の草創期である 1950 年代から現在に至るまでの著作は、斯界の発展に主導性を発揮し貢献すると同時に、広く世界の研究者に多大の影響をもたらしました。“Development of the Sociology of Higher Education” (1973) は大衆高等教育の発展を分析した重要な業績でありますし、上述の Higher Education System : Academic Organization in Cross-National Perspective (1983) (拙訳『高等教育システム：大学組織の比較社会学』東信堂、1994 年) はいまや高等教育研究における古典でありますし、さらに

近著 *On Higher Education: Selected Writings 1956-2006* (2008) は碩学のこれまでの業績の集大成であるとみなされます。

教授は日本の高等教育研究に関心を示すと同時に研究者との交流を深めましたが、そのことは上記近著において交流の深かった世界の研究者や友人 80 人を列挙して特に謝辞を述べている中に、日本では喜多村和之、潮木守一、川嶋多津夫、丸山文裕、天野郁夫の各氏と筆者を列挙して謝辞を述べている点にも窺われるでしょう。

なお、私事になって恐縮ですが、筆者は、イェール大学の社会・政策研究所 (ISPS) でクラーク教授が主宰する Yale Higher Education Research Working Group に第 1 次新渡戸フェローとして派遣され、客員研究員として 2 年間 (1976-78) 滞在する機会に浴しました。当時はまだ 50 歳代半ばの教授のもとには、ポストクの Roger Geiger, Daniel Levy の各氏をはじめ優秀な若手研究者が蟠集し、活気に溢れた雰囲気醸成されていて、何かと貴重な刺激を受けました。また、種々の著作が中国語、スペイン語、ポルトガル語などに翻訳されていますが、上述の HES (1983) と *Places for Inquiry: Research and Advanced Education in Modern Universities* (1995) の翻訳 (拙監訳『大学院教育の国際比較』玉川大学出版部、2002 年) を通じて、浩瀚な著作の一端を日本の読者に紹介する機会を得ました。こうした経験からも、高等教育研究と科学社会学の関係に注目するなどして構築されたクラーク先生の個性豊かな学風からも、幸運にも学習の機縁を多々与えられました。ここに学恩に深謝し、謹んでご冥福をお祈りする次第であります。(2009.12.12)